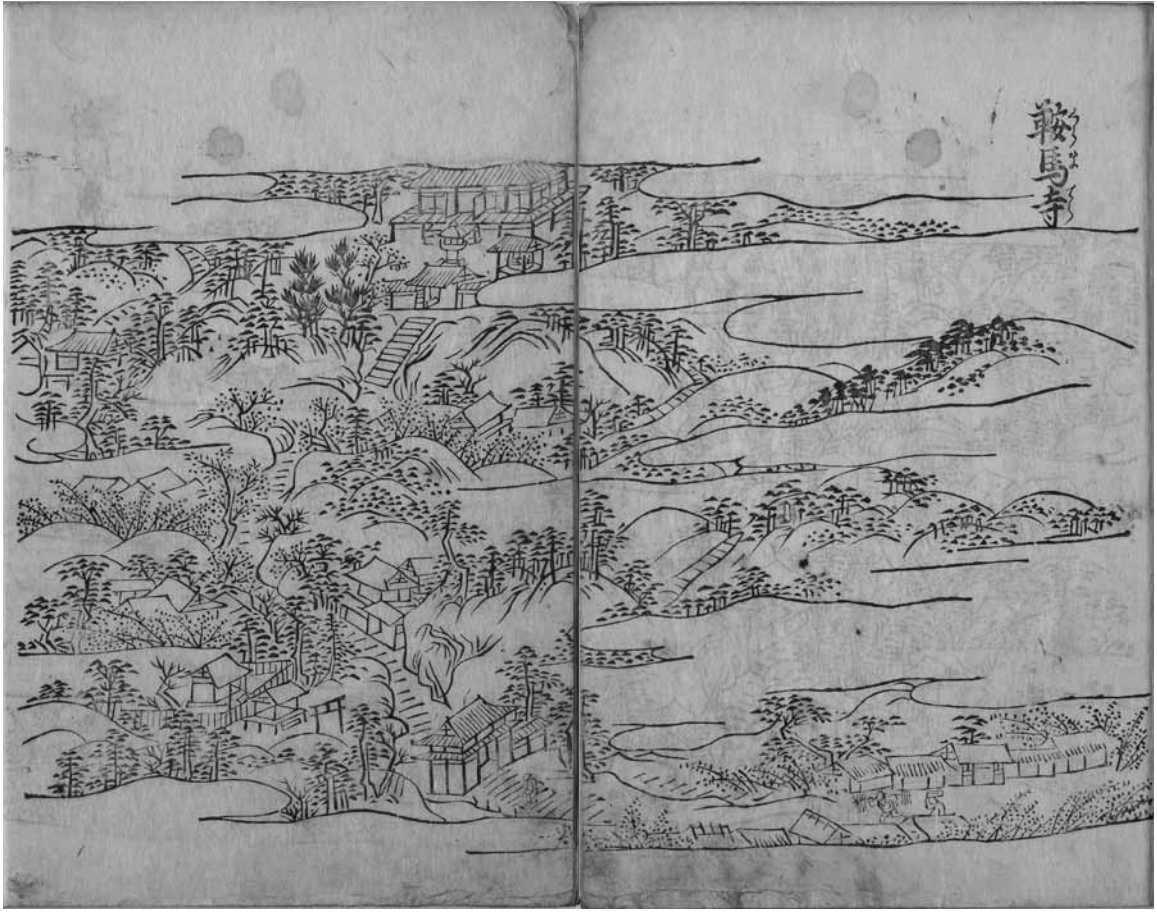


卷八「鞍馬寺」



京都府立総合資料館蔵

鞍馬寺

○此寺は都より三里ほと北なり  
鞍馬寺は、大中大夫藤伊勢人の創せる所なり。  
大夫、仏をたうとめることふかくし。ただ勝地を  
見。道場をたて。観音像を安置せんことを  
思へり。延暦の間、或夜の夢に城北の山に  
いたり。白髪の翁に逢しに。かの翁、大夫に  
告しは此地天下にすぐれ。山は三鉾に似  
て常は五色の雲たなびき。猶も靈区也。  
汝練若を營せば。利益無量ならんとぞ  
大夫、夢中に翁の名とひしに王城鎮守(四才)

貴船明神やさめくいせまをともつて。け  
しハ大夫久しくかへる白馬に。鞍よそほひ  
いひしは。むかし摩騰法蘭は。舍利像經を白  
馬にのせ震旦にきたれり。されば白馬は靈  
畜也。汝さだめて夢の地をしるならんと  
て。一童子そへはなちしに。其馬城北に向ひ  
山阿の茅草中にぞとまりぬ。童かへりて  
此事つげ侍れば。大夫行て。其地を見ける  
に。夢にたがはずしかも。茅裏に毘沙門天  
像を多たり。すなはち一字をたて。かの像  
をすへ。さて鞍馬寺と。号しぬ。されど(四ウ)

京都府立総合資料館蔵

卷八

【原文】

鞍馬寺

○此寺は。都より三里ほと北なり  
鞍馬寺は。大中大夫藤伊勢人の創せる所なり。  
大夫。仏をたうとめることふかくし。ただ勝地を  
見。道場をたて。観音像を安置せんことを  
思へり。延暦の間。或夜の夢に城北の山に  
いたり。白髪の翁に逢しに。かの翁。大夫に  
告しは此地天下にすぐれ。山は三鉾に似  
て常は五色の雲たなびき。猶も靈区也。  
汝練若を營せば。利益無量ならんとぞ  
大夫。夢中に翁の名とひしに王城鎮守(四才)  
貴船明神也。さめて何処ともしらて。け  
れは。大夫久しくかへる白馬に。鞍よそほひ  
いひしは。むかし摩騰法蘭は。舍利像經を白  
馬にのせ震旦にきたれり。されば白馬は靈  
畜也。汝さだめて夢の地をしるならんと  
て。一童子そへはなちしに。其馬城北に向ひ  
山阿の茅草中にぞとまりぬ。童かへりて  
此事つげ侍れば。大夫行て。其地を見ける  
に。夢にたがはずしかも。茅裏に毘沙門天  
像を多たり。すなはち一字をたて。かの像  
をすへ。さて鞍馬寺と。号しぬ。されど(四ウ)

観音乃像くわんおんなり。秘ひがたにたり。十  
 けさよよあらはるふ。その夜よの夢ゆめに。十  
 五六歳ごばりの童子どうし。きたり。観音多門  
 名なことにして。体たいおなじきなどつげ侍  
 へ観自在の像しやうをそなへたるとぞ。今  
 の西にしの観音院くわんおんいん是也これ。そのち峰延ほうえん法師  
こゝにすみ。靈應れいおうつたへけると也也。(五才)

京都府立総合資料館蔵

観音くわんおんの像しやうおかずて。ねがひいまだ。と  
 げさるよ。と思おへる。その夜よの夢ゆめに。十  
 五六歳ごばかりの童子どうし。きたり。観音多門  
 名なことにして。体たいおなじきなどつげ侍  
 りしゆへ。うたがひとき。後日また又一室いつしつをか  
 まへ。観自在くわんじざいの像しやうをそなへたるとぞ。今  
 の西にしの観音院くわんおんいん是也これ。そのち峰延ほうえん法師  
こゝにすみ。靈應れいおうつたへけると也也。(五才)

【校訂本文】

鞍馬寺

○此寺は、都より三里（注1）ほど北なり。

鞍馬寺は、大中大夫（注2）藤伊勢人の創せる所なり。大夫仏をたうとめることふかくし、ただ勝地を見、道場をたて、観音像を安置せんことを思へり。

延暦（注3）の間、或夜の夢に城北の山にいたり。白髪の翁に逢しに、かの翁大夫に告しは、此地天下にすぐれ、山は三鉈杵（注4）に似て常に五色の雲たなびき、猶も靈区也。汝練若（注5）を營せば、利益無量ならんとぞ。大夫、夢中に翁の名とひしに、王城鎮守貴船明神（注6）也。さめて何処ともしらでければ、大夫久しくかへる白馬に鞍よそほひいひしは、

むかし摩騰法蘭（注7）は、舍利像経を白馬にのせ、震旦（注8）にきたれり。されば白馬は靈畜也。汝さだめて夢の地をしるならんとて、一童子そへ、はなちしに、其馬城北に向ひ山阿（注9）の茅草中（注10）にぞとどまりぬ。童かへりて此事つげ侍れば、大夫行て其地を見けるに、夢にたがはずしかも茅裏に毘沙門天（注11）像を多たり。すなはち一字（注12）をたてかの像をすへ、さて鞍馬寺と号しぬ。されど観音の像おかず、ねがひいまだとげざるよと思へる。その夜の夢に、十五六歳ばかりの童子きたり。観音多聞（注13）名ことにして体おなじきなどつげ侍りしゆへ、うたがひとき、後日又一室をかまへ、観自在（注14）の像をそなへたとぞ。今の西の観音院是也。そのち峰延法師（注15）ここにすみ、靈心つたへけると也。

【注】

- (1) 長さの単位。一里は約三、九キロメートル。
- (2) 従四位上の唐名。
- (3) 平安時代初期の年号。西暦七八二年〜八〇六年。
- (4) 密教の修法に用いる仏具の一つ。両端が三つに分かれ、とがった爪がある。
- (5) 人里離れた修行の地。寺のことにも言う。蘭若とも。
- (6) 平安京の水神。祈雨、止雨の神。
- (7) インドの高僧。撰摩騰と竺法蘭のこと。天竺から多数の経典を後漢時代の中国にもたらした。
- (8) 中国の別称。
- (9) 山の隈。山の入り組んだところ。山合いの土地。
- (10) チガヤなどが茂る草深い土地。
- (11) 四天王の二で、北方の守護神。日本では七福神の一でもある。
- (12) 一つの堂塔。
- (13) 多聞天のこと。毘沙門天の別名。
- (14) 観音菩薩のこと。
- (15) 東寺で修行した僧。鞍馬寺中興の祖と言われる。平安時代初期の寛平年間（八八九〜八九八）に活躍した。大蛇を祈り封じこめたと伝えられ、その故事は現在の竹切り会式の元となった。

【現代語訳】

この寺は都から三里ほど北にあります。鞍馬寺は大中大夫であった藤原伊勢人が草創した所です。大夫は仏を尊ぶ思いを深くして、ひたすら仏にふさわしい優れた土地を選んで修行の場を設け、観音像を安置しようと思っていたのです。

延暦の時代、或夜の夢の中で、都の北山に行き、白髪の老人に出会ったところ、その老人が大夫に告げよう言うのです。この地は世に優れた地であつて、山は三鈷杵の形に似ていて、いつも五色の雲がたなびいており、まさに靈妙の土地なのです、そなたが寺を建てれば、その御利益は計り知れませんと。大夫が夢の中で老人に名前を尋ねたところ、王城の地の守護神である貴船明神なのでした。夢が醒めて、大夫はその場所がどこなのかわからなかつたので、長らく飼っている白馬に鞍を懸けてこう言いました。

昔、摩騰と法蘭は仏舍利、仏像、経典を白馬に乗せて中国に運んで来たという。つまり白馬は靈力を持った家畜なのである、お前はきつと夢の中の土地がどこなのか知っているに違いないと。そこで、一人の童子を添えて放したところ、その馬は都の北に向かい、山合いの草深い土地に留まつたのです。童は帰つてこのことを告げたので、大夫が行つてその土地を見ると、夢の通りであり、しかも草むらの中から毘沙門天像を見つけたのです。そこで一堂を建ててその像を据え、それをこそ鞍馬寺と号したのです。しかし、観音像を置かないまま、念願はまだ果たしてないことよと思つていました。その夜の夢に、十五六歳ほどの童子が現れて、観音と多聞天（毘沙門天）とは名前こそ違ふが、本体は同じなのだと告げたことから、疑いを晴らして、後日、また別に一堂を設けて観音像を安置したということです。現在、鞍馬寺の西にある観音院がその一堂です。その後、峰延法師がここに住んで、この靈験を伝えたのです。

（山崎福之）